神戸史談 304（平成21年7月）

邪馬台国は大和

古代史研究家　碓　井　洸

Ⅰ．倭人伝と天文道

邪馬台国の所在地として考古学的に現在最も注目されているのが奈良県桜井市の北部の天理市との境にある纒向遺跡です。南北1.5キロ、東西2キロの広さを誇るその中心部で、東西に軸線を揃え、柵列を伴った三棟分の建物跡が2009年3月に発見され、女王卑彌呼の宮殿の一部ではと大きく報道されました。今回発掘された建物跡のすぐ西側からは、かつて大規模な土坑群も見つかっており、伊勢神宮の新嘗祭のルーツ跡とも考えられています。

大和盆地の東南の三輪山の麓に二世紀後半に突如出現し、そして四世紀代に消えた広大な纒向遺跡からは、関東から九州までの各地の土器が大量に出土し、また、大規模な人工的な運河（大溝）も見つかり、初現期の前方後円墳も密集することから、人・物・情報が集まる巨大な政治・宗教・経済都市の遺跡と考えられている。

この纒向遺跡の年代が卑彌呼が女王として倭国に君臨した三世紀前半とも重なることから、倭国連合国家の首都が置かれた邪馬台国の中枢であることは、考古学的に確実と考えられる。それは、この纒向遺跡のすぐ北側の天理市柳本の黒塚古墳や天神山古墳から大量の三角縁神獣鏡や漢式鏡が出土していることからも言えるものと考える。（拙著『三角縁神獣鏡と邪馬台国　古代国家成立と陰陽道』2006、参照）

この三輪山の西北一帯に初期ヤマト王権つまり邪馬台国の中心があったと考えた時、そこまでの行程つまり北部九州の伊都国からの「水行十日陸行一月」の「一月」が一恒星月（27.32日）に一致することから、28宿の理念に基づいて行程が設定されていることを論じたことがある。（拙著『邪馬台国は大和である　邪馬台国四国ルート論』1997）

そこで改めて魏志倭人伝を見てみると、28宿や一太陽年（365日）など天文道との密接な関係があることが明らかとなる。この事実から、当時の倭人が月や太陽の運行についての知識を有し、それを国名や人名の漢字の文字数・画数などで数学的に見事に表現していることが明らかとなる。それを日中両国の魏志倭人伝や古事記など古典の原文から探っていく。邪馬台国論争は、主に文献史料に依拠しており、従って倭人伝に始まり、倭人伝で終わるものと考えられるから。

Ⅱ．倭人伝と太陽信仰　倭人伝の新解釈

倭人伝で最も問題となっているのが行程論ですが、この解釈を巡って邪馬台国の所在地が決まるだけに、邪馬台国論争はこれに尽きると言っても過言ではありません。そこで改めて倭人伝に登場する国々の名称を原文（岩波文庫『新訂魏志

倭人伝』1985.所収百納本）の国名の画数から見てみると、28宿・太陽年とのつながりが明らかとなる。

倭国を構成するのは、対馬から邪馬台国までの8国と旁国として一括して記される20国（旁国として最後に記される奴国は前段に登場するので省略）の計28国です。その国名の画数を8国と20国に分けて原文どおりに一覧にすると表１のようになります。

表1　倭国28国　国名画数一覧

Ⅰ	①對海	24	②一大	4	③末盧	21	④伊都	17				
	⑤奴	5	⑥不彌	21	⑦投馬	17	⑧邪馬壹	30				
	計	139										
Ⅱ（旁国）	⑨斯馬	22	⑩巳百支	13	⑪伊邪	14	⑫都支	15				
	⑬彌奴	22	⑭好古都	22	⑮不呼	12	⑯姐奴	13				
	⑰對蘇	34	⑱蘇奴	25	⑲呼邑	15	⑳華奴蘇奴	41				
	㉑鬼	10	㉒為吾	16	㉓鬼奴	15	㉔邪馬	18				
	㉕躬臣	17	㉖巴利	11	㉗支惟	15	㉘烏奴	15				
	計	365										
	合計	504										

Ⅰのグループ8国の画数は素数の139に対して、Ⅱのグループ20国の画数は1年365日と一致しており、ⅠとⅡの合計504は28宿の18倍、12黄宮の42倍の数字となっている。このように旁国20国の画数を太陽年に合わせながら、28国全体では28宿・12黄宮の倍数にも合わせているのである。

そこで、ⅠとⅡを一緒にして考えるとさらに興味深い事実が明らかとなる。Ⅰの⑤と⑧の画数にⅡの⑯以下㉘までの13国の画数を足すと28宿の丁度10倍の280となるのに対して、残りのⅠの6国の画数にⅡの⑨から⑮の7国の画数を足すと28宿の8倍で金星の公転周期日の224となるのである。それを国名番号で表す。

A.　(⑤＋⑧)　＋　(⑯＋⑰＋⑱＋⑲＋⑳＋㉑＋㉒＋㉓＋㉔＋㉕＋㉖＋㉗＋㉘)
　＝ (5＋30)　＋　(13＋34＋25＋15＋41＋10＋16＋15＋18＋17＋11＋15＋15)
　＝　35＋245　＝　280

B.　(①＋②＋③＋④＋⑥＋⑦)　＋　(⑨＋⑩＋⑪＋⑫＋⑬＋⑭＋⑮)
　＝ (24＋4＋21＋17＋21＋17)　＋　(22＋13＋14＋15＋22＋22＋12)
　＝　104＋120　＝　224

Aは15国で31文字で280画に対して、Bは13国で28文字で224画となっていたのである。このように倭人伝に記された各国の国名は旁国20国で太陽年の日数365日と画数を合わせながら、一方で旁国以外の国と一緒になって28宿などとも天文道で連ながっていたものと考えられる。なお、AとBの旁国の並びから、邪馬台国＝大和ルートをAの⑯～⑳に比定して陸行一月が27.32日の一恒星月に合致することから倭人伝行程の方位が28宿に合わせていることをかつて論じた。(前

掲『邪馬台国は大和である　邪馬台国四国ルート論』）

帯方郡・邪馬台国の距離

もう一つ、倭人伝行程記事で問題となるのが距離です。帯方郡～邪馬台国間の距離を倭人伝は一万二千余里とするが、この12000里は太陽の運行を示す12黄宮（黄道）の千倍ですが、倭人伝は帯方郡～伊都国間の距離を４区間に分けるが、その合計は12黄宮の875倍の10500里とし、伊都国～邪馬台国間は12黄宮の125倍の1500里とし、両方を太陽運行に合わせながら７対１の比例関係となるように設定しています。

12000 －（7000＋1000＋1000＋1000＋500）＝12000－10500＝1500

10500：1500 ＝875：125 ＝7：1

こうして得られた伊都国～邪馬台国の距離の1500里は当時の魏の尺度で換算すると、１里＝430メートルですので645キロとなるが、これは伊都国と邪馬台国の卑彌呼の宮殿があったと考えられる奈良県桜井市の三輪山の麓の纏向遺跡を直線で結んだ最短のライン上に想定される行程の実距離とも一致しております。（前掲『邪馬台国は大和である　邪馬台国四国ルート論』参照）

Ⅲ．倭人伝と漢書地理誌

倭と燕

倭人伝を考える上で絶対見逃せないのが漢書です。漢書は前漢（B.C.202～A.D.8）のことを記した正史として、三国志より200年位古いA.D.82年に成立した歴史書です。その28巻が地理誌に当てられ、その燕地条の楽浪郡の記述の中に倭人が初めて登場し、「楽浪海中倭人有り分かれて百余国、歳時を以て来り献見す」と倭人の楽浪郡への朝貢記事が記される。

この楽浪郡の置かれた燕は、漢帝国を28宿分野説で13国に分けられた中の１国として、河北省・東北南部・朝鮮半島北部を占める、かつての戦国七雄の大国です。その燕を銅器などに記された金文では匽と記しているが、その匽という文字は宮廷などで行われた魂振り神事を舞い行う巫女の姿を表しているとされる。これに対して、倭という文字は、稲魂を被せて低く舞う巫女の姿を表すとされ、この匽と倭は宴にも通じた音も相通の一系の文字とされる。（白川静『字通』参照）

この匽・倭は安（an）にも通じるが、この燕（匽）の地で出土する銅剣・銅戈などは弥生時代を代表する青銅器文化のルーツともされるなど、両国（地）の関係は朝鮮半島を介して紀元前から続く長く深いものと考えられる。それを文献の面からさらに探っていく。

倭国と燕の比例関係

三国志倭国伝と漢書燕国（地）条に記された両国の地名の文字数・画数などを数量化すると、最大公約数を２の累乗とする比例関係になっています。

①（国名・画数）燕：倭　＝　16 ：10 ＝ 8 ：5（2）

②（県・国数）　〃　＝　144：28 ＝ 36：7（4）

③（県・国画数）　〃　＝　2792：504 ＝ 349：63（8）

両国の国名・県名などは倭人伝は百納本、漢書は中華書局本（1962）の原文によりますが、両者を数量化すると、2の一乗、二乗、三乗を最大公約数とする比例関係となります。

以上のように倭・燕両国は、その国名を表した文字の音義が通じるというだけでなく、その国の実体を表した構成要素の素成も規則的な比例関係となる極めて関係の深いことが明らかになる。そこでさらに両国の戸数についても考える。

戸数表示と太陽信仰

倭人伝の各国の戸数表示を見てみると、6国は戸数、2国は家数表示となっています。対馬・末盧・伊都・奴・投馬・邪馬台国は戸数となっているのに、一大（一支）と不彌の2国は家数となっています。そこで6国の戸数を足しますと1年365日の丁度400倍の数字となります。

一方、漢書によると燕国は11郡からなっているが、その中の倭に近い楽浪郡から西に順番に並ぶ6郡の戸数の合計も365日の倍数となっており、この点からも倭と燕は戸数を一太陽年365日を最大公約数とする比例関係でつながります。

（倭6国戸数）対馬・末盧・伊都・奴・投馬・邪馬台＝1000＋4000＋1000＋20000＋50000＋70000＝146000

（燕6郡戸数）楽浪・玄菟・遼東・遼西・右北平・漁陽＝62812＋45006＋55972＋72654＋66689＋68802＝371935

倭6国：燕6郡＝146000：371935＝400：1019（365）

戸数という国の実体支配を表す最小単位数でも倭と燕とは連ながります。それでは、倭の一大（一支）と不彌の2国は戸数でなく「三千許家」「千餘家」と家数にしたのか、それについて少し考えてみます。一大は韓国語ではハンタ、つまり秦を意味すると考えられ、一方の不彌の不は剖（わける）と一系の文字、彌は糜（び）と通じ、「つなぐ」意味から（前掲の『字通』）、九州と本州を分け、つなぐ関門海峡を挟んだ豊前・周防を中心とする国と考えられ、そこが、『隋書』倭国伝の竹斯（筑紫）の東にあったとされる秦王国と考えられることから、一大・不彌の両国は、韓国を経て倭に渡来した秦王朝の亡命者集団が集住した国と考えられ、それで三国志韓伝の表記に合わせて家数表示したと考えられる。その韓伝の辰韓条に「有似秦人、非但燕、済之名物也」つまり辰人は秦人に似ているが、燕人に似ていないの意味を裏読みすると、倭は燕と似ていることとなる。

もう一点、家数表示で述べると、その表示法の文字の画数を28宿に合わせてい

表2　一大・不彌国の家数表示と28宿

国名（画数）	家数表示	画数				
		1字	2字	3字	4字	計
一大　(4)	三千許家	3	3	11	10	27
不彌　(21)	千餘家	3	16	10		29
（計）(25)		6	19	21	10	56

ることである。文字順に画数を記す。(表２)
一大の家数表示画数は27、不彌の家数表示は29と、28宿を挟んだ対称数となっているのである。一大以外の7国はすべて餘戸（家）となっているのに、一大は許家としているのは画数を28宿に合わせるためと考える。

なお、この両国の家数表示に国名画数の25を足すと古代中国の帝王を象徴する数字9の二乗数の81となることも、この両国が華夏つまり中国人の国であったことを改めて示すものと考える。

どちらにせよ、倭国（連合国家）の範囲は、燕の青銅器文化の影響下にあった石川・愛知ラインより西側、太平洋側はもう少し東の天竜川以西の西日本全体と考えられるが、その中で一支と豊前・周防は秦氏の拠点と考えられる。そのように考えると、卑彌呼共立で倭国成立の契機となった２世紀半ばの倭国乱は、中国戦国時代に覇権を争った戦国七雄の秦と燕の末裔による倭国での再現であったと想像するのも許されるものと考える。

Ⅳ. 倭人伝と記・紀

卑彌呼はヤマトトトヒモモソヒメ

倭国王として邪馬台国＝大和に君臨した卑彌呼は我が国の歴史書である古事記・日本書紀（以下、記・紀とする）に登場する歴史上の人物の誰に相当するのか。これについても古来諸説があって定説を得ていない。それについて、桜井市の箸墓の後円部直径が倭人伝に記される卑彌呼の墓が径百余歩つまり150メートルと一致し、かつ筑造年代も３世紀中ごろと卑彌呼の没年にも近いことから、その被葬者の倭迹々日百襲姫命（以下モモソヒメとする）が最も有力と考える。

モモソヒメについて、紀では三輪山の神である大物主神との神婚説話など人よりも秀れた能力を有する女性として記され、それが卑彌呼の衆を惑わす鬼道とも通じること、また箸墓の筑造について、紀が昼人作り、夜神作ると記していることも箸墓が特別な墓であったことを示すものと考える。そこでモモソヒメとその父である第７代孝霊天皇の御名、大日本根子彦太瓊天皇との記・紀での表記の画数関係を見てみる。両者の画数を一覧にすると表３のようになる。

表3　モモソヒメと孝霊天皇の御名

出典	（モモソヒメ）			（孝　霊）			合計	
	御　名	文字	画数	御　名	文字	画数	文字	画数
記	夜麻登登母々曾毗賣命	10	94	大倭根子日子賦斗邇命	10	78	20	172
紀	倭迹々日百襲姫命	8	73	大日本根子彦太瓊天皇	10	69	18	142
計		18	167		20	147	38	314

記・紀における両者の御名の画数を比較するとモモソヒメのほうが孝霊より丁度20多くなっている。一方、横の合計は記の方が紀より丁度30多くなっているが、両者の画数の合計は円周率の3桁と同じ314となっている。これと卑彌呼の画数

の差は28宿の10倍の280となるが、一方、両者を足すと12黄宮の29倍の348となる。そして、合計に追号の孝靈の画数31を足すとピタゴラス数の数字が並ぶ345となる。

314 － 34 ＝ 280 （ ＝ 28 × 10）
314 ＋ 34 ＝ 348 （ ＝ 12 × 29）
314 ＋ 31 ＝ 345 （ ＝ 23 × 15）

ところで、紀のモモソヒメの画数は１太陽年365日の約数の73となっている。そこで、これを中心にして孝靈の縦の２つの御名、横の２人の御名の合計に73を加えた数字を足すと365に100を足した465となる。

147 ＋ 73 ＝ 220
172 ＋ 73 ＝ 245
220 ＋ 245 ＝ 465

こうして得られた数字と孝靈の追号の画数31は15対1の比例関係となっているが、両方を加えると3番目の完全数の496となる。

465 ： 31 ＝ 15 ： 1
465 ＋ 31 ＝ 496

なお、箸墓古墳の筑造時期について、その出土土器の布留０（ゼロ）式から筑造は270年以降でそれが卑彌呼没年の248年と合わない点から、卑彌呼以降の大王陵とする説がある。しかし、最近の炭素年代・年輪年代法の進歩により布留０式の年代も240年頃まで上がるとする説が有力となっており、箸墓を卑彌呼の墓とする説が優勢となってきたと考える。

女帝としての卑彌呼

もう一つ、名称の画数について考える。それは日本書紀に登場する神功皇后から40代の持統天皇までの５名の女帝と女王としての卑彌呼＝モモソヒメについてです。その漢風名としての追号と和風名としての御名の画数を登場順に一覧にすると表４のようになる。37代齊明は皇極の重祚で御名は同一だから省略。

表4　女帝名称の画数

代数	追号	画数	御　　名	画数	（計）
	卑彌呼	34	倭迹々百襲姫命	73	107
	神　功	15	氣長足姫尊	47	62
33	推　古	16	豐御食炊屋姫天皇	79	95
35	皇　極	21	天豐財重日足姫天皇	75	96
37	齊　明	22			22
40	持　統	21	高天原廣野姫天皇	73	94
	計	129		347	476

卑彌呼を含めた追号の画数の合計は129画に対し、御名の画数の合計は347画で、両方を足すと476画となる。この総画は28宿の17倍の数であるが、この476の数字を一つずつ足すと17となる。

476 ÷ 28 ＝ 17
4＋7＋ 6 ＝ 17

さらに、太陽年365日との差は六方陣の魔方陣の定数の111となっている。

476 － 365 ＝ 111

卑彌呼と神功の画数の34と15は四方陣と三方陣の魔方陣の定数となっているが、御名の画数を足すと12黄宮の10倍、そして両者の全画数は13の二乗数の169となっている。この二人はどちらも天皇ではないが、神功紀には、神功皇后を卑彌呼に当てる記述があることは、推古以下４天皇と天文道で結ばれることを意図していたものと考える。功皇后については、その実在性も含めて多くの議論があるが、卑彌呼に擬するために意図的に付加されたと考えるが、それは、他の女帝の名称の画数関係から、単に付加されたとするよりも、最初の女帝としての卑彌呼と推古以下の４名の女性天皇を天文道・陰陽道でつなぐ目的のために付加されたものと考える。

倭連合国家の最初の実質上の大王にして、そして、ヤマト王権の最初の女王として、推古以下４名の女帝系譜と28宿・天文道で連ながっていた卑彌呼＝モモソヒメだが、改めて６名の女帝と７代孝靈との画数関係を見てみる。

周知のように記・紀に登場する天皇は古事記は33代推古までに対して、日本書紀は40代持統までの合わせて延べ73名で構成されている。それで6名の女帝の名称は日本書紀によることになるが、孝靈の追号と御名の画数は日本書紀で31と69の合わせて丁度100画となる。これを6名の女帝の画数に加えた576は24つまり12黄宮の２倍の二乗数となっている。

476 ＋（31＋69）＝ 476 ＋ 100 ＝ 576（＝ 24 × 24）

こうして得られた数字に、孝靈の古事記の御名の画数78を加えた654は、1年365日に17の二乗数の289を足した数字となっている。

576 ＋ 78 ＝ 654 ＝ 365 ＋（17 × 17） ＝ 365 ＋ 289

17という数字は6名の女帝名称の総画476と28宿の係数でもあったが、今、また孝靈を加えた7名の大王と太陽年を結びつける数字としても使われていたのである。つまり卑彌呼はその父である孝靈を介して、他の5名の女帝と太陽年で連ながっていたものと考える。その意味では卑彌呼は日御子つまり太陽の化身と考えられる。

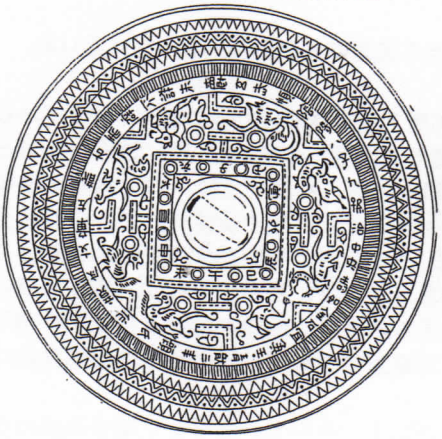
Ⅴ．三角縁神獣鏡は卑彌呼の鏡

邪馬台国はどこにあったのか、卑彌呼は誰でその墓はどれか、と共に邪馬台国論争の大きな争点は、卑彌呼が魏から賜与された銅鏡百枚の中に三角縁神獣鏡は入るのか入らないのかという点です。私は魏の紀年の入った三角縁神獣鏡もあることから銅鏡百枚に入っていたと考えます。それを2枚の紀年鏡などから考えます。（図１・２）

青龍３年鏡

一つは青龍3年（235）銘方格規矩鏡が、大阪府高槻市の安満宮山古墳から

図1　青龍三年銘　方格規矩鏡



大田南古墳群他調査報告書
峰山教育委員会 1998

図2　景初四年銘　写真と拓影

謎の鏡　卑弥呼の鏡と景初四年銘鏡
京都府埋文センター編　明舎出版 1989

1997年に5枚出土した鏡の中にありました。三角縁神獣鏡1枚を含む4枚の鏡には作鏡者名を含む完銘がありその作鏡者名を示す1鏡当たり4文字計16文字の画数は12黄宮と28宿の最小公倍数84の倍の168画となっていました。内訳は吾作明鏡が2枚で82画、顔氏作竟が40画、陳是作鏡46画となっていて合計すると168です。

ところで青龍３年鏡の作鏡者名は顔氏作竟でその銘文は全部で39文字で右回りになっていて、その画数は12黄宮の26倍の312画です。1文字平均8画ですが、外圏帯には小円文の入った複波文が、1年365日の約数の73個巡っています。

なお、この青龍３年鏡の同笵鏡が京都府丹後市の大田南５号墳からも出土していますが、その鈕口の方向は逆になっています。この大田南５号墳の発掘調査報告書（峰山町教育委員会、1998）は青龍３年鏡の銘文39文字の3分の1の13文字が正字以外の異体字・略体字などとしている。その文字（漢字）の画数を確定するために、正字に戻して画数を数えたが、猷（龍）、乕（虎）それと鏡の略体字として頻出する竟はそのまま数えた。

景初４年鏡

もう一つの紀年鏡として、景初４年(240)銘磐龍鏡を考えます。1984年京都府福知山市の広峯15号墳から景初４年鏡が出土しましたが、その年号が実在しないことで大きな話題となりました。その銘文は全部で35文字で左回りになっていて、その画数は12黄宮の25倍の300より65少ない235画となっていました。つまり、文字数は1年365日と200を、そして画数は300を挟んだ対称数となっています。

景初鏡としては、他に景初３年銘の画文帯神獣鏡と三角縁神獣鏡の合わせて３種類があり、太陽年や28宿など天文道・陰陽道に関係する兄弟鏡として、三角縁神獣鏡の試作・始原鏡として、卑彌呼の意向に沿って魏の工房で作られた特鋳鏡

と考えられる。

ところで、景初４年鏡を青龍３年鏡と比べますと、鏡式、銘文の回り、そして分布状態も全く対照的となっています。景初４年鏡の同笵鏡がかつて宮崎県の持田古墳（現辰馬考古資料館蔵）から出土していますが、この２つの紀年鏡の銘文を合わせた全部で74文字の画数は547画となりますが、これと1年365日の差は1年364夜の丁度半分の182となります。一方、547画を2倍すると、365日の3倍の1095から1を引いた数となります。

547 － 365 ＝ 182 （＝364 ÷２）

547 ＋ 547 ＝ 1094 （＝(365 ×３） － １）＝ 1095 － １

そこで、両鏡の紀年と作鏡者名を表す語句合わせて16文字の画数を足すと、1年365日と2対5の比例関係となっている。（表５）

表5　青龍3年・景初4年鏡の紀年・作鏡者名の画数関係

	（紀　年）					（作　鏡　者）					合　計
	青	獣	三	年	計	顔	氏	作	竟	計	
	8	13	3	6	30	18	4	7	11	40	70
	景	初	四	年	計	陳	是	作	鏡	計	
	12	7	5	6	30	11	9	7	19	46	76
計	20	20	8	12	60	29	13	14	30	86	146

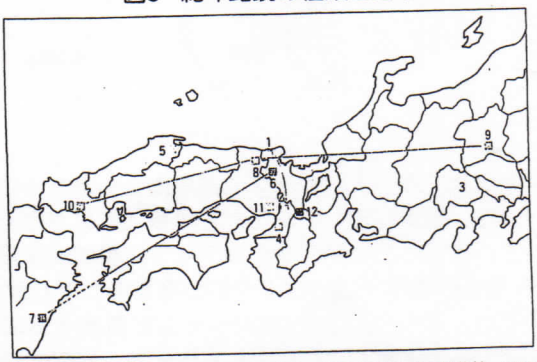
146 ： 365 ＝ 2 ： 5 (73)

両鏡の紀年・作鏡者という重要語句を表す文字は太陽年など天文道に合わすために、龍を略体字にしたり、氏と是を使い分けたり、鏡の偏を略したりしながら画数を調整していたのである。その流れの中で作られたのが実在しない年号の景初四年鏡であったのである。三と四では画数が異なるために太陽年に合わすために四としたのである。

どちらにせよ、この２つの紀年鏡はどちらも三角縁神獣鏡ではないが、安満宮山古墳から出土した青龍３年鏡は一緒に出土した三角縁神獣鏡と28宿など天文道につながり、そして、今、景初４年鏡とも太陽年などで連ながっていたことが明らかとなった。

そこで、魏の紀年鏡を出土した古墳の位置関係（図

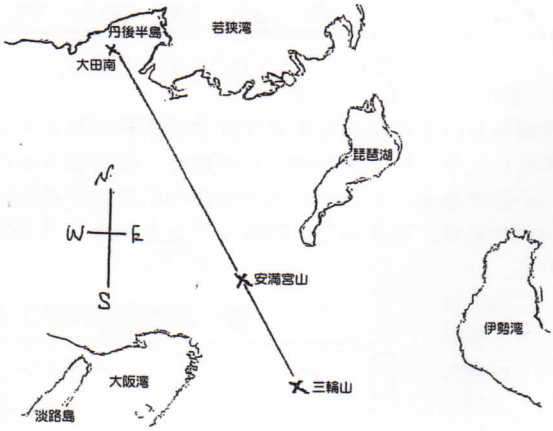
図3　紀年銘鏡の種類と分布



卑弥呼誕生　邪馬台国は畿内にあった？　大阪府立弥生文化博物館　1997

	紀年銘鏡	年代	出土した古墳	古墳の形
1	青龍三年方格規矩四神鏡	235年	京都府峰山町・弥栄町　大田南5号墳	方墳
2	青龍三年方格規矩四神鏡	235年	大阪府高槻市　安満宮山古墳	方墳
3	赤烏元年対置式神獣鏡	238年	山梨県三珠町　島居原古墳	円墳
4	景初三年画文帯同向式神獣鏡	239年	大阪府和泉市　黄金塚古墳	前方後円墳
5	景初三年三角縁同向式神獣鏡	239年	島根県加茂町　神原神社古墳	方墳
6	景初四年斜縁盤龍鏡	240年	京都府福知山市　広峯15号墳	前方後円墳
7	景初四年斜縁盤龍鏡	240年	辰馬考古資料館蔵　伝宮崎県持田古墳群	
8	正始元年三角縁同向式神獣鏡	240年	兵庫県豊岡市　森尾古墳	方墳
9	正始元年三角縁同向式神獣鏡	240年	群馬県高崎市　柴崎蟹沢古墳	円墳
10	正始元年三角縁同向式神獣鏡	240年	山口県新南陽市　竹島古墳	前方後円墳
11	赤烏七年対置式神獣鏡	244年	兵庫県宝塚市　安倉高塚古墳	円墳
12	元康□年対置式神獣鏡	291～299年	五島美術館蔵　伝京都府上狛古墳	

図4　大田南5号墳・安満宮山古墳と三輪山の位置関係



3）を見てみると、青龍３年鏡を出土した２つの古墳を結んだラインは初期ヤマト王権（邪馬台国）のシンボルの奈良県桜井市の三輪山と連ながる。（図４）そして、ほぼ南北に伸びるこのラインに景初４年鏡を出土した２つの古墳と正始元年（240）鏡を出土した3つの古墳をそれぞれ結んだラインがほぼ東西からクロスする。そして、この3本のラインに景初３年鏡を出土した２つの古墳のラインが西北から東南に伸びながら交差する。卑彌呼が魏に初めて朝貢したのは、景初

2年（238）であり、青龍3年の235年には、魏とは未交流だが、魏の紀年を有する唯一の方格規矩鏡として、卑彌呼の要望により特別に魏で作られた紀年鏡としては最も重要の鏡であることは、三輪山と連ながることからも明らかである。

三角縁神獣鏡は魏で作られた卑彌呼の特鋳鏡

ところで、青龍3年以外の魏の紀年鏡は景初3年は三角縁神獣鏡と画文帯神獣鏡、景初4年は磐龍鏡、そして正始元年（240）は三角縁神獣鏡と型式も異なる4種類の鏡となっているが、その作鏡者名は全て陳是作であり、語句も共通点が多く、魏の工房で短期間に同一工人により作られたものと考えられる。そこで、この最初の朝貢時に合わせて作られた鏡以降の三角縁神獣鏡も魏で作られた魏鏡として倭国に賜与されたものと考える。

三角縁神獣鏡は卑彌呼に賜与された魏鏡説、つまり中国で作られ舶載したとする根拠として、笠野毅氏は6点あげる。①高度の製作技術　②漢字・漢文による銘文　③陳氏・張氏などの作鏡者名　④魏の元号の存在　⑤魏代に限定された字句　⑥「銅鏡百枚」記事。(「三角縁神獣鏡は語る」『古代を考える邪馬台国』吉川弘文館．1998)。

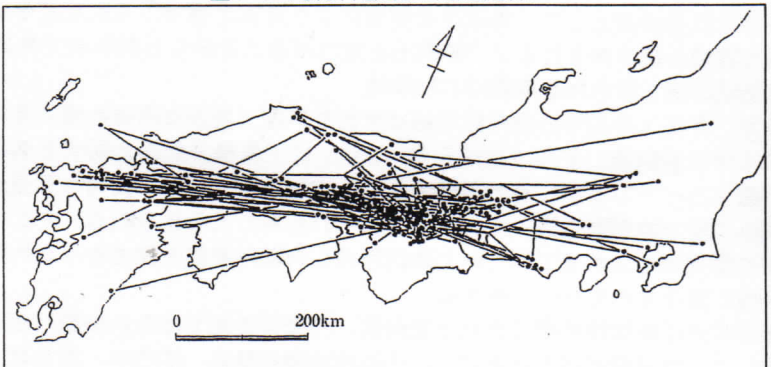
これ以外に、倭が燕地の楽浪郡などを中心とする華北と28宿・太陽年など天文道と連ながっていたことも重要なポイントと考える。それを最も象徴的に表した鏡の例を述べる。

静岡県磐田市新貝にある遠江で最古の畿内型前方後円墳とされる松林山古墳から戦前に後藤守一氏によって発掘出土した三角縁神獣鏡の鈕は蟾蜍（ヒキガエル）の形をした大変貴重な鏡であった。そして、その銘帯には、吾作明鏡で始まる14文字の銘文が刻まれていたが、それと完全に一致し、かつ字体・書体も相似の銘文を有する方格規矩鳥文鏡が、かつての燕の地と考えられる河北省易県の燕下都から発見されました。この事実を発見したのは福永伸哉氏ですが、それを佐伯有清氏は肯定的に評価しています。(『邪馬台国論争』岩波新書．2006)。

因に、かつての燕上都は現在の北京と考えられています。北京の古名は燕京ですが、どちらにせよ重要な地域です。三角縁神獣鏡と方格規矩鏡と鏡式は異なるが、銘文が一致していたことは、そこに込められた理念の一致、共通性を示したもので、先の2つの紀年鏡と通じる天文道との関係があると考えられます。どちらにせよ、三角縁神獣鏡は魏で作られた舶載鏡であることが改めて証明されたものと考えます。

そして、仿製つまり国産とされる三角縁神獣鏡も全て中国で作られたと考えられますが、その製作に当たっては、倭国・卑彌呼の天文道・陰陽道の理念に基づいて作られたものであり、従って、その分布・配布の中心に位置する大和が邪馬台国であったことを、この点からも証明するものと考える。（図5）

図5　三角縁神獣鏡の同笵関係



岸本直文「銅鏡百枚 卑弥呼が魏からもらった鏡」
『三国志がみた倭人たち 魏志倭人伝の考古学』山川出版社2002

Ⅵ．結語

以上、文献史料・考古資料から、伊都国から邪馬台国への「水行十日陸行一月」の「一月」が27.32日の一恒星月つまり28宿であったという事実から、それが中国漢王朝の国家支配原理の28宿分野説など天文道・陰陽道を燕・楽浪を介して倭国も、そのネットワークに組み込まれていたことが明らかとなり、伊都から邪馬台＝大和の陸行一月行程を28宿に合わせることが、偶然でなく、必然であったことが明らかとなり、邪馬台＝大和は歴史理論としても証明されたものと考える。

日本の国家起源に関る最重要課題である邪馬台国問題を歴史理論としてさらに確実にするためには、中国・日本などの文献史料の詳細な文字・画数なども含む基礎的研究と共に、鏡などに刻まれた銘文などの考古資料との照合などが今後益々重要になるものと考える。

４千年以上前の夏王朝の二里頭遺跡などの発掘を国家プロジェクトで実施している中国に比べ、それよりも遥かに新しい1800年位前の邪馬台国の最有力候補地の奈良県桜井市の纏向遺跡の発掘は自治体による行政発掘が主であり、余り進んでいないものと考える。

一方、古代史学の対象としての邪馬台国問題も主に考古学者まかせで、理論的研究は余り進展していない現状と考える。それが、中学などでの日本史教育では、半世紀以上も放射説・直線式の二者択一の邪馬台国行程論を未だに踏襲していることにも反映しているものと考える。

自国史としての起点ともいえる邪馬台国問題への若者の関心を惹起するためにも、戦後、教育現場、歴史学から全面的に排除された記・紀を復権させて、東アジア史の中での倭国史として、ダイナミックでロマンに満ちた古代史像を築くべき時期が訪れているものと考える。